

随想

作文能力は重要

作文の本質は研究の原点か??

(株)P P Q C 研究所 加藤 宏光

インターネットで情報をスクリーニングして面白くコラムに行き当たった。

「思いつかないでしょう。」小学校一年生の書いた作文が「すごい才能」「本当に秀逸」というものである(三月二十五日のライブドアニュース)。

ぐでちち withTy 2y のハンドルネームでのツイートを取り上げての記事であった。

ぐでちち withTy 2y 氏は件の小学一年生の父親とのこと。曰く「長女小一の作文、長いけど読んでやってほしい。親の僕は爆笑した」の書き出しで始まるツイートの内容は以下のように記されている(以下引用・筆者、多少カット)。

「おもいつかないでしょう。」長女小一の作文、長いけど読

んでやってほしい。

親の僕は爆笑した。題名はシンプルに「どうしよう」(内容は掲載されている原稿用紙の写真にあるものをそのまま引用)。

きょうは学校でさく文かきます。おもいつかないでしょう。みんなかいてる。わたしは、どうかな。かいてない。「先生たすけて、おねがいね。」たすけてくれない。どうしよう。ほかにかいていない人いるかなあ。かんがえていないのにあたまたがいたい。なんでかな。もうすくで、三じかんめがおわっちゃう。いのこりになりたくないよ。「どうしよう」、もういつしようさく文かいたく(かきたく・筆者注)ないよ、「ともしびよもつか。」どうしよう。あと五ふんでおわっちゃう

う。あっそうだ。いまの気もちをさく文にかこう。でもじかんがないんだよ。どうしよう。かけないのは、やだよ。

この作文に先生は花丸をつけている。

このツイートに対して、j タウンネットの編集者からの大人の評がついている。確かに大人の目から見れば、それらしい大人の意見が出る。

しかし、筆者はこの大人の評を参考にしたくない。なぜなら、こうした際には大人は常に上から目線で物事を見るし、その姿勢からの評であるから…(評が温かろうと、厳しかろうと)。

筆者にも小学三年生の時の作文に大きな思い出がある。正直いつて、筆者は小学校三年生ま

では決して出来が良い生徒ではなかった。むしろ劣等生であった。多分何をやらせてもトロかったのだと思う。この作文が筆者の人生を変えたともいえるので、そのいきさつはかなり鮮明に覚えていた。

作文の題は自由で、筆者は《ぼくの算数》という題で書き始めた。小学校三年生に自由な題は少し厳しいと思う。何を書くのかしばらく迷った挙げ句、その前の日の夜に母が見てくれた算数の宿題を、なかなか解けなかったことを思い出したのであった。

当時は物事の理屈がうまく理解できていなかった筆者にとって、二桁の掛け算や割り算は苦手であり、たまたまその前日の夜、母が夕食後に算数を教えてくれた。父親は縁あって、大阪

強くたたいた。

「わからない。痛い! どうすればこの地獄から抜けられる?」

そんな思いで、一時間余りを過ごした。問題がうまく解けた記憶はない。しびれを切らした母は、教えるのを諦めたのであったろうか?!

件の作文の時間に、どうしてその地獄のさまを書こうと思ったのかは定かではないが、一所懸命に教えている母の気持ち、応えたいがどうにも付いていけない自分の頭、そして「たたかれるか、もうたたかれるか?」と思っている怖さ、たたかれても、母の期待に答えられない自分のじれったさ、をこの作文に縋々と書き連ねた。

五〇分の時間内で書いたのは二ページほどであったが、あつたことを思い出して書き、そして、できない子供を何とかしたい母の気持ち等をそのまま述べると、案外にスムーズに書き終えることができ、子供であった筆者は「ほつー」としただけであった。ところが、次の国語の時間に担任の先生が《作文の評価》について授業で述べ始めた。真っ先

に筆者の作文が紹介されたのである。

その評価は《絶賛》といえよう。先生の言葉を借りれば、「小学校三年生で《自分の気持ち、お母さんの気持ちを素直に伝え、至らない自分をしつづけるために体罰を下す母に対し、至らぬ時にはその体罰を思い出して反省する》、という。この作文のような赤裸々に気持ちを述べた作文に先生はこれまで出会ったことがない!!」

そういった表現で、教室の目の前で褒められたのであった。いわば劣等生であった筆者はそれまで人前で褒められた経験がなかった。初めての経験で、何かしら《開眼》したように思えたのである。

ちなみに、同級生の作文はほとんどの内容が《日曜日に両親とどこかへ出かけました。お弁当を食べました。楽しかった。うんぬん》であり、気持ちの描写がまったくなかった。筆者は幼いなりに「作文とは、自分にしかない気持ちや自分が考えたことを書き出すことなのだ」と理解したのであった。

過日、NHKのドキュメンタリー番組で《新型コロナウイルスの感染動態を細胞変化の経時的追跡で明らかにする》というテーマの報道があった。内容は非常に興味深いものであったが、ここでは話題の場が異なるので紹介しない(大阪大学微生物研究所所属の女性研究者の活動を述べたもの)。

この研究を博士課程の学生に見せた折に、学生が《疑問》を投げかけた。件の女性研究者は次のように答えた。「さあ、わかりませんね。ぜひその疑問について、自分で調べてみてください。誰もが答えられない疑問を追跡するのが《研究》なんですヨ!!」

しかり、しかり。誰にもわからないから、自分が調べる。指導者がいなかった筆者は、大学生活の時から現在に至るまで、自然に問いかけ、鶏に問いかけ答えを求め続けてきている。

先に挙げた作文のツイートに接し、研究者としての気持ちの原点は、小学三年生のかの《作文》と先生の《絶賛》にあったのだ、と今さらのように感じる。